

## 令和6年度お茶の水女子大学経営協議会〔第1回〕議事録

日 時：令和6年6月25日（火）15：00～17：10

出席者：（学外委員）五十嵐委員、河村委員、久能委員、小安委員、佐藤委員、篠塚委員、豊田委員

（学内委員）佐々木学長、加藤理事、新井理事、石井理事、坂元理事、谷理事、赤松副学長、太田副学長、福本副学長（事務総括）

（陪 席）宮井監事、中野監事

曹副理事、斎藤副理事、山田副理事、

新名文教育学部長、横川理学部長、飯田生活科学部長、大瀧共創工学部長

安成大学院人間文化創成科学研究科長

### I. 議事録（案）の確認

記録内容及び大学ホームページへの掲載について、了承した。

### II. 学長報告

#### 1. 共創工学部開設記念式典の実施報告について

資料に基づき、令和6年6月7日に共創工学部開設記念式典を開催し盛会であったことの報告があり、レセプションにおいて藤崎委員から祝辞を頂いたことの紹介があった。

#### 2. 統合報告書2024について

資料に基づき、第一刊となる『INTEGRATED REPORT 2024 お茶の水女子大学統合報告書』を2024年5月に発刊したことの報告があった。

### III. 審議事項

#### 1. 令和5事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について

坂元理事より、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

豊田委員：理系女性育成啓発研究所の女子中高生向け講座受講者の本学の受験や進学状況のデータがあれば、今後の大学のブランディングに活かせるのではないかと。

佐藤委員：共創工学部について、実際に入学した学生の期待感と大学が提供する教育がミスマッチを起している可能性もある。学部のあり方をもう一度考える時期が来ることが予想されるため、今後、学生とのコミュニケーションをより深くして、注意を払う必要がある。

また、コンピテンシー育成開発研究所については、学生が手に入れたコンピテンシーを対外的に公表することによって、就職等に活かすなどの取り組みをしているか？

（坂元理事）：研究所としては、コンピテンシーを育成することに着目して研究及び実践をしており、それを社会の場にプレゼンテーションしていくことは、今後の検討課題としていきたい。

久能委員：理科系への意欲はあるが男子学生が多数である環境が嫌だという女子学生に機会を与える存在として、また全ての人に同じ教育を与えるという教育へのアクセシビリティの意味からも、奈良女子大学とお茶の水女子大学に非常に期待をしている。

五十嵐委員：法人の基本的な目標、ミッション、ビジョンがあり、それを中期目標や中期計画に落とし込んで事業に取り組んでいるが、個別の評価指標に注目しがちで、経営協議会の審議を行う上で、全体としての大学のミッション、ビジョンとしての進捗の手応えが分かりにくいいため、工夫が必要である。

## 2. 令和5年度決算について

加藤理事より、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

佐藤委員より、資産運用によって財務体質を強める体制を作っていくことを考えていく必要があるとの助言があった。

## 3. 令和7年度概算要求について

加藤理事及び福本副学長（事務総括）より、令和7年度概算要求について、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

## 4. インフラ長寿命化計画（個別施設計画）の改訂について

加藤理事より、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

## 5. 国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則第4条第4項の規定に基づき年俸制を適用して雇用する教員の就業に関する規則の一部改正について

加藤理事より、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

### III. 報告事項

#### 1. 監事候補者の選考について

佐々木学長より、資料に基づき説明があり、令和6年9月1日付けで本学に就任する予定の監事候補者を、国立大学法人お茶の水女子大学監事候補者の選考に関する取扱いに基づき選考し、現監事の宮井真千子氏を常勤監事候補者、中野和子氏を非常勤監事候補者として文部科学大臣に推薦したことの報告があった。

#### 2. 国際交流データについて

石井理事より、資料に基づき報告があった。

#### 3. 外部資金獲得状況について

石井理事より、資料に基づき報告があった。

4. 令和5年度卒業生・修了者の進路状況について

新井理事より、資料に基づき報告があった。

5. その他

(1) 令和6年4月～6月における本学の主な活動について

赤松副学長より、資料に基づき報告があった。

IV. 意見交換

1. お茶の水女子大学の国際化促進のための取組について（継続事項）

佐々木学長及び石井理事より、本学の国際化の方針と現状に関わる情報について資料に基づき説明があり、前回の経営協議会からの継続事項として、本学の国際化促進のための取組について意見交換を行った。

■学外委員からの主な意見等は以下のとおり。

篠塚委員：外国人留学生の現状の資料によると、中東上位1位がアフガニスタン30人（うち国費留学生21人）であることに注目したい。2001年9. 11アメリカ同時多発テロ事件を背景にアフガニスタン問題が浮上し、特にアフガニスタン女性の教育環境の劣化に女子大学こそ何か支援できることがあるのでは、との強い意図から、お茶の水女子大学がグローバルな女子教育支援のために他の女子大学に声掛けをしてできたのが、「五女子大学コンソーシアム」である。このコンソーシアムが取り組んだ20年の結果が、まさにこのアフガニスタンの留学生の数値30人に現れている。世界中の様々な国で新たな紛争や社会問題が起きている現在、もう一度、コンソーシアム設立の原点に立ち返り、何か国際的な貢献をする時期にあるのではないか。

佐藤委員：①何のために国際化をするかということについて、世界的な社会課題への取り組みができる人材の育成という立て付けになっているが、その具体的な方策が、「外国人留学生を増やすこと」あるいは「海外の大学との連携を強めること」の2点に絞られており、目的と具体的な方策があまりに離れていると感じる。アカデミアとして、GX、カーボンニュートラル、少子高齢化、あるいは食糧問題といった世界的社会課題に取り組める人材を育成するのだとすれば、単に留学生数の増加や、他大学との協定などではなく、もっとターゲットされたものでなければいけないはず。お茶の水女子大学として世界的社会課題に取り組むには、何をターゲットにするのか、それにはどういう人材・教育が必要なのかについて議論を深める必要がある。具体例として、国際的なネゴシエーションができる能力を持ち、国際機関でディプロマティックな動きをして国の利益を反映でき、日本の経済的ポジショニングを上げられるような国際人材が日本の大学では欠けており、女性にはそのポテンシャルがあると考ええる。

②外国人留学生の数を増やすことはよいのだが、他大学等の現状として大学院を修了した留学生の9割は母国に戻っており、これは日本にとっては相当大きな人的損失として問題となっている。お茶の水女子大学大学院を修了した外国人留学生の日本における就職の比率はどの程度か？

(石井理事)：就職状況のデータは悉皆調査ではなく、就職すると回答した留学生のデータであり、日本における就職の比率は不明である。

河村委員：ジョイント・ディグリー・プログラムまでを狙って、いくつかの有力な大学とコネクションを深めようとしているのか？

(石井理事)：協定を始めるときは、まずは学生・研究者交流の話からであり、ジョイント・ディグリーやダブル・ディグリーというものは、ハードルが高く実現していないところである。

小安委員：国際化というものは何かと考えると、本質的にはダイバーシティの問題で、どれだけ多様な文化に触れるかということだと思う。どこへ行っても様々な文化を受け入れ、そこで生活できるということが一番重要であり、単に語学や単位の問題だけではない。例えば、就職についてならば国際機関で働く卒業生数は非常に重要なメルクマールになる。受け入れた学生の就職については、受け入れる企業側の改善課題もあるが、卒業する人たちがどれだけ多くの選択肢を持てるかは、大学が示してあげなくてはいけない。「国際化」と矮小化して考えるのではなく、もっと広くダイバーシティ、グローバリゼーションとは何かということから、文化も含めて考えてもらいたい。

豊田委員：①女子大学として国際化を進める際に、女性の問題を抱えているような地域の留学生を受け入れて、その問題に対する意識といったものを高めていき、なぜこれを行っているのかということを知りやすく示していくことも、国際化の打ち出し方としてはあると思われる。

②自身の経験から、留学は価値観に触れるという意味はあったが、国際化ということを知って知ったのは、勤務先のロイター通信で一つの課題解決を言語の違う人たち、課題の違う人たち、バックボーンの違う人たちと突き詰めて話し合うということやったからである。もし費用面などで留学に困難があるのだとしたら、課題などを作って、提携校などとプロジェクトチームを作り、そこで議論をしながら何らかのものを生み出すという国際的なプログラムを実施することも一つの代替案かと思われる。

久能委員：お茶の水女子大学、あるいは日本の女子大学ができることは、ダイバーシティ&エクイティ&インクルージョン (DEI) である。80年平和を保ってきた日本という安全な場所だからこそ、アメリカ、イラン、中国などの立場の違う国同士の女子学生が集い、助け合う気持ちを持って話し合い、互いを知ることができるのではないかと。それが本当のDEIの精神であり、国際化であると思う。

佐々木学長：貴重なコメントやご意見をたくさんいただき、課題もいただいたと思っている。

## V. その他

佐々木学長より、今後意見交換の時間配分に努める旨と、閉会の挨拶があった。

以 上